

子どものより良い育ちにむけた関係機関とのネットワーク  
～支援が必要な子どもと保護者の為のネットワーク作り～

千葉県 香取市 山田区保育協議会  
府馬保育園 八都保育園 山倉第二保育園 山倉保育園  
発表者 山倉保育園長 江波戸和代

### 保育園の概要

府馬保育園	定員70名	現員59名	職員総数13名	設立年月日	昭和29年 7月 1日
八都保育園	定員90名	現員86名	職員総数15名	設立年月日	昭和55年 4月 1日
山倉第二保育園	定員45名	現員41名	職員総数11名	設立年月日	昭和27年12月26日
山倉保育園	定員60名	現員50名	職員総数12名	設立年月日	昭和23年 4月 1日

### 設置市区町村概要

人口78,982人 保育所数 11か所(公) 10か所(私)

## 1 はじめに (設定理由)

近年、保育現場では、落ち着かない子、こだわりのある子など、気になる子が多く見られるようになってきている。保育士も支援に関する各種研修に参加し勉強をしているのだが、本当にこのやり方で良いのか、疑問に感じることもあり、担任保育士が疲労してしまうこともある。

私達は、支援が必要な子どもや保護者に対して、[チーム]として支援することで、担任だけが疲労することのないよう、また、いろいろな角度から保育を見直すためにも、専門機関との連携は必須と考える。

そこで、保育士が指導を受けたり、保護者に必要な情報を提供、サポートをする為に、私達自身が、香取市のネットワーク体制がどうなっているのかを知る必要があると考え、設定した。

## 2 山田区保育協議会の取り組み

山田区保育協議会では、各4園で情報交換や保育の質を高めるための研修会を定期的に行っている。気になる子や配慮を必要とする子についての事例をだして支援の仕方を検討している。

《山田区保育協議会事業計画》

- 保育内容研修会 ・気になる子について(2回)
  - ・保護者対応について
  - ・園内研修について

○保育士研修会 ・講師を招いての講演・演習

○職員研修会 ・全職員での講演

○各園の気になる子（障害児、言語・情緒）の実態

12月現在	府馬保育園	八都保育園	山倉第二保育園	山倉保育園
0. 1.2歳児	1名(1)	1名(1)		5名(4)
3歳児	1名(1)	2名(2)		
4歳児	4名(1)	1名	2名(1)	1名(1)
5歳児	3名(2)	2名(1)		

※（ ）の数字は専門機関に診てもらっている。

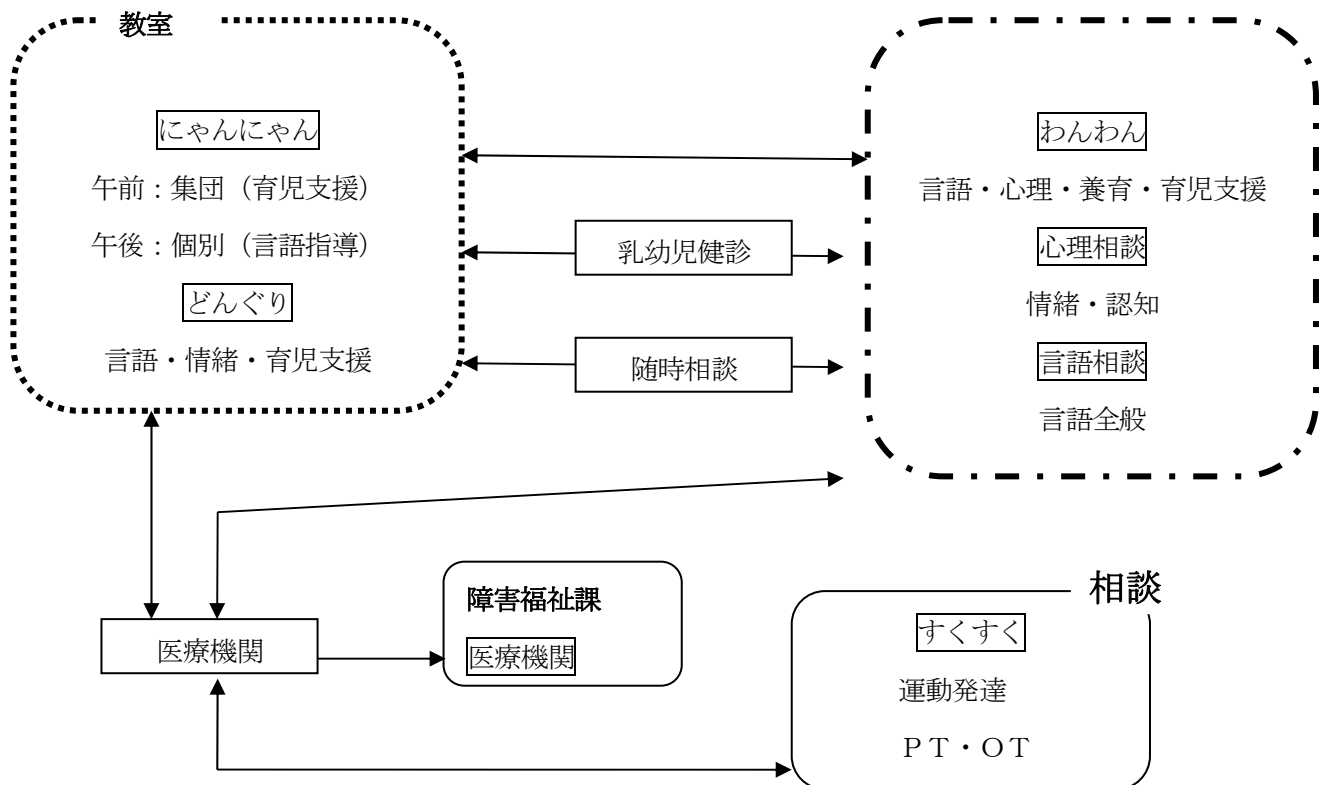
### 3 香取市の発達相談事業（健康づくり課=保健センター）について

#### 【対象児】

①乳幼児健診等で、言語・心理・養育・運動など発達面に問題のある子ども

（吃音、発達がはっきりしない、置換音、多動や自閉傾向等）

②随時相談等で、心配のある子ども



### 4 香取市教育委員会（香取市特別教育体制推進事業）

○特別支援教育コーディネーター研修会（2回）

○巡回相談

## 5 事例

### 事例1

#### Yくんについて（4歳児）

##### ◎Y君の行動

・集団行動がとれない・気持ちの切り替えが難しい・乱暴になってしまったり気持ちのムラが激しい。

○家庭環境・厳格な父は厳しく躾ることで大丈夫だと思っている。母は、本児の行動をネット等で検索し「療育」が必要なのではないかと不安に思っていた。

☆専門機関へどうつなげていくか。

- 1 ・コスモスの花の訪問指導
- 2 ・コスモスの花の専門指導員と両親、担任、園長と面談
- 3 ・園から保健センター保健師への相談
- 4 ・保健師の訪問
- 5 ・保健師から家庭へ連絡
- 6 ・保健センターに行き、臨床心理士、保健師、両親、本児、面談
- 7 ・コスモスの花の施設見学→福祉サービス受給証の取得申請
- 8 ・旭中央病院小児科受診と発達外来への予約
- 9 ・福祉サービス受給証の取得
- 10 ・コスモスの花と契約
- 11 ・旭中央病院発達外来受診
- 12 ・発達検査

### 事例2

#### A君について（3歳児）

##### ◎A君の行動

・集団行動がとれない・会話が一方通行・コミュニケーションがとれない・かみつき

○家庭環境・父は厳しい。母は子育てに熱心であるが本児の発達に不安を抱えている（気性が激しい）

★専門機関にどうつなげていくか

- 1 ・園から保健センター保健師への相談
- 2 ・保健師の訪問
- 3 ・園・保護者との面談によりコスモスの花を紹介
- 4 ・コスモスの花への施設見学→本児とは合わない拒否
- 5 ・3歳児検診を受けて、保健師から再度、病院受診を勧められる
- 6 ・現時点では、病院受診には行っていない。
- 7 ・29年度は退園し、幼稚園へ入所予定

## 6 まとめ

今回の研究を通して、改めて香取市の関係機関がどういうネットワークになっているのかを知ることができた。

健康づくり課は、乳幼児健診を、子育て支援課は育児相談を始め、入園申請等、社会福祉課は4園が社会福祉法人でもある為、行政機関としては、保育園にとって割と身近な機関でもあるのだが、教育委員会（学校教育課）は、その性質上、あまり関わりがなく、また、縦割り行政に近いこともあり、表立ってのネットワークがわからずにいた。しかし、香取市が平成19,20年度に県の特別支援関連の指定になったことを受け、教育委員会による保育園への巡回指導、及び特別支援コーディネーター会議に参加できるようになったことから、保育園と教育委員会もネットワークを構築することができた。特に7月に行われる巡回指導には、教育委員会や保健師、特別支援学校のコーディネーターが同席するため、各方面から子どもを見ることが出来るので、早期発見に繋がり、入学後の子供達の支援がスムーズに進んでいる。

## 7 今後の課題

今回の研究における事例検討では、『困った子ども・家庭』ではなく、『困っている子ども・家庭』であるということを改めて確認できた。しかし、中には、その困り感に気づいていない（もしくは認めない）子ども、家庭もあり、どうアプローチすべきか、子どもにとっての最善の利益を第一に考えていかなければならないと感じた。

特に、平成28年8月8日付けで出された「保育所保育指針の改定に関する中間とりまとめ」にもあるが、（障害のある子ども、特別な配慮を必要とする子どもへの対応）として、提言されたように、保育所とは子どもが日々の生活や遊びを通じて共に育つ場所であり、全ての子どもの健やかな育ちを支援する為にある。一人ひとりの障害は様々であり、その状態も多様な為、発達過程や心身の状態を把握し、理解することが重要とあることから、保育士のスキルアップは緊急の課題である。それと並行して専門機関との連携、担任だけではなく、保育園全体をチームとして、支援していくことが重要であり、その支援体制を構築することも課題としてあげられる。保育園で気になる子は、ある種の育てにくさを抱えているため、保護者（母親）が孤立しかねず、頑張るあまりに虐待になってしまうこともある。それを回避する為に、保育園として何ができるのかをチームとして考えていかなければならない。また、診断されない、いわゆるグレーゾーンの子供達への支援をどうすべきか？ということもこれからの課題と捉える。診断がされた子ども達は、専門機関との連携が取れるが、学習障害、識字障害、知的遅れを伴わない高機能自閉症の場合、就学してからでないと発見されないことが多く、本人が生きにくさを抱えてしまい、登校拒否や引きこもり、うつ病といった二次障害を起こしてしまう。だからこそ、乳幼児期に周囲が気づき、支援することで、困ったことがあると、「助けて」「わからない」という言葉が言える子どもに育てていかなければならない。